

「不安」を生きるための「手紙」 正宗白鳥「微光」論 ——夏目漱石「三四郎」における「手紙」と関わらせながら——

大島 丈志

一、はじめに

正宗白鳥「微光」は、明治四三年一〇月、『中央公論』(第二十五年第一〇号)に掲載された。翌四四年六月、単行本『微光』が靑山書店から刊行され、「呪」「徒勞」も同時に収録された。

本論では、「微光」論を行うにあたり、次の二つの観点から考えたい。

一つ目は、日露戦争後の時代状況との関わりからである。平岡敏夫は正宗白鳥「何処へ」の主人公健次の「僕はね奥さん、誰にも好かれたくも同情されたくもないんです」「つまり人間は自分一人だ」といった台詞に触れて、「(一)には、日露戦後の青年の孤独感が切実に吐露されている」(二)と述べる。同じく正宗白鳥の「微光」においても、主人公のお国はもしろんのこと、その他の登場人物の行動の底流にある行くあてのなさ、明日の分からなさ、明治初期の「富国強兵」「立身出世」とは異なる日

露戦争後の不安を抱えた「個」のあり方と密接に結びついていると考えられる。「微光」のお国と、お国の周辺的人物も含めながら、「微光」に描かれた日露戦争後の時代状況と「個」のあり方について考察したい。

二つ目に、お国にとって「蜜のやうな言葉や文字」と表現される、「手紙」の側面からこの作品にアプローチしたい。お国の手紙に対する執着の強さには特徴がある。なぜ、それほど執着するのか、この作品において「手紙」の果たす役割について考えたい。この考察にあたっては、明治四一年九月一日から一二月二九日、東京・大阪の『朝日新聞』に連載され、翌四二年五月、春陽堂から単行本が刊行された夏目漱石の「三四郎」における「手紙」の存在も考察の対象として使用したい。

なお、正宗白鳥「微光」のテキストは、正宗白鳥『正宗白鳥全集』第二卷(福武書店、昭和五八年六月)を使用し、引用の際は頁数のみを記す。

二、「微光」の評価と問題点

正宗白鳥「微光」は、同時代において高い評価を受けた作品であった。「微光」掲載前後の『中央公論』編集長瀧田樗陰とのやりとりについて白鳥自身の次のような発言がある。

この原稿を読んだ瀧田君は、直ちに俾を飛ばして私を訪問して、唾を飛ばしながら激賞したので、私も安心した（中略）私が批評家の立場から見ると、

この小説は通俗味の勝つた浅薄な作品であったのだ。秋声氏や秋江氏はさう思つてゐたらしかなかった。（二）

同時代評では、『中央公論』掲載後から高評価が続いた。例えば「正宗氏近來の最大傑作である。（中略）作の背後に物凄い作者の主観がある。人物は何れも生々と描かれ中にもお国はよく写された」（三）として、作者の主観と人物の描写、特にお国の描写を高く評価するものがあり、「『微光』一篇は白鳥の創作家的天分の如何に卓抜して居るかを証明するものだ。文章も簡潔明快に印象も鮮かだ」（四）といったように高い評価が下されている。

さらに次のような高い評価を与えたものがある。

最近の彼の作品、就中『微光』に於ては、客觀の事實そのものを尊重するやうな傾向を仄めかして居る。やゝともすれば一種の隱遁主義に墮するか、然らずんば剝削的な肉の満足に歿し去らうとする傾向のあつた彼の絶望的な虚無的な人生觀が、その絶望の淵、虚無の世界へ歿し尽さずに、新らしく現実生活の客觀的研究に向つて来て、その落ち着き所を芸術の天地に見出さうとしつゝあるのは、彼の為に誠に喜ばしい傾向である。（五）

以上の主な同時代評からは作者の主観を入れながらも客觀的に人物や現実生活を表現した小説として高く評価されていることが分かる。

ただし、お国のモデルとなつたとされる女性を白鳥と争つたとされる近松秋江は、「四十三年小説界概觀」の中で、「私も知つてゐる女性のことだが、私は読んだ時、『これだけにしか書けなかつたかなあ』と独り思つた。全体あゝ材料を洗張りをして仕立て直すのは損だ」（六）とし、再構成により女性が描き切れていないとする。さらに単行本の刊行後に、徳田秋声は、朝川とお国の關係の描写が足りない点などを指摘しつつ、「作其物の価値判断は暫らく措いて、単に技巧の点から言つて、私は正宗君

の作のうちでは余り感服しないもの、一つだと思ふ」「客観化が足らないとも言へるだらう」(七)とお国の描写の客観化の不足を指摘している。

現代の「微光」に触れた主な考察をあげると、猪野健二は、「うらぶれた愛欲の世界にうごめく一人の女をとりあげ、淡淡とした無感動の筆であてもなく男から男へと漂う一個の自然主義的な女性像を描きあげている」(八)と自然主義的な女性としてお国を読む。紅野敏郎は、「自我にめざめた新しい女という点もまったく描かれていない。その日暮らしのなかで、チマチマと生き抜いていく、いささかのバイタリテイは持っていた」(九)とお国の低いところを流れるような人生を描いている点に注目している。

この猪野の引用部分の考察に対し、山本芳明は、お国は「現実」からのしっぺ返しを受けていることに気づかない存在であるが故に破滅しないと、次のように述べている。

白鳥の「成熟」とは、初期の作品から見つめ続けていたディスコミュニケーションの世界を、白鳥の分身ともいえるような主人公の青年によって観念的に批判させるのではなく、〈女性〉という〈他者〉が

とり結ぼうとする関係性を通して、世界そのものを描いていくことを意味していたのである。(一〇)

では、山本の述べる「世界そのものを描く」とは具体的にどういうことなのだろうか。この点は山本論には詳細は十分にふれられていないため補っていきたい。加えて同時代評の中で本論の観点とも重なる、日露戦争後の時代の中からお国を読み込んだ片上天弦の評を挙げよう。(以降傍線論者)

過去を追憶して悔むには、自分等の心は余にかたくなになつてゐる。現在を不安心に物足らなく思へば思ふ程、尚更過去などは悔いたくない。さればとて恐れや疑ひや、凡ての不安を抑へ切る程の強情も張り切れない。(中略) かういふ心持は何時の間にか自分等の云ふこと為すことを支配してゐる。お国の心持ちは自分等の胸臆を遺憾なく表はしたものであるとは言へないかも知れぬが、少なくとも、聞いて貰ひたくもあり隠して置きたくも思ふ自分等の気分を象徴的に表はしてくれたと言つてもよいと思ふのである。(一一)

同時代の抑えるに抑えがたい「不安」を象徴的に表したものと「微光」が読まれていたことが分かるだろう。この点は非常に興味深い。この「不安」という点に注目しながら、まず日露戦争後の時代との関係の中で「微光」を捉えていきたい。

三、日露戦争後の時代と「微光」

明治初期に顕著であった、対外的な独立のための理念「富国強兵」は、明治初期においては国民の大きな目標ともいえるものであった。

しかし、日露戦争後、一応対外的な独立が達成され、それゆえに、個人は国家的目標から切り離され、個の世界を見つめる動き、人生いかに生きるべきかを考える動きが生まれてきた。そのことは既成の道徳、「立身出世」への懐疑、人生の価値観を問い直そうと煩悶する青年層を生んだ。その象徴的な存在は、第一高等学校生、「敵頭の感」を残して自死（明治三六年五月）した藤村操であった。これは、当時の「煩悶青年」の共感を呼んだ。

この藤村操の自殺について白鳥は二葉亭四迷との対談で話題になったことを後年語っている。まず、二葉亭の発言から引用しよう。

藤村操の「敵頭の感」あんな物は俺が死ぬなら俺は書かない、たゞ死ぬる。あれを書くうちはまだ未練があるのだと云ふと正宗君が、「私は新聞や雑誌へ「敵頭の感」を書いて居ます。作は私の「敵頭の感」です。作が出来なくなつた時は私の死ぬ時です。」とかう言つて居た。やつぱり生れて来た甲斐に此世へ何か足跡を残して行きたいと見える。俺はそこが面白いと思ふ。其所が人間さ。（一一二）

同じ話題を白鳥は次のように述べる。

彼れが、年にも似合はず、「藤村操の投身」事件を話題として、同情のある感想を述べてゐたのを、今も覚えてゐる。（一一三）

日露戦争後の煩悶する青年の象徴であった、藤村操について二葉亭・白鳥がある程度の共感を持っていたことが分かる。この時期の青年の煩悶について荏部直は次のように述べる。

日本がロシアとの戦争に勝利し、列強の一員へとその地位を高めたことは、国家の独立確保という従来

の国民的課題の達成を意味した。国家のために悪戦苦闘して出世競争に励むという目標はもはや失われる。弛緩の雰囲気の中で、青年たちは、国家への無関心の傾向を強め、社会秩序から独立した「個」の意識を強烈に成長させるようになる（中略）旧来の権威や習慣に反発して、自己の解放と拡充を目ざし始める。そして哲学や宗教に没頭し、あるいは享楽生活に向かったのである。（一四）

先に挙げた同時代評において「不安」な「自分等の気分を象徴的に表はしてくれた」とされるならば、「微光」のお国には、日露戦争後の青年の不安がどのように象徴されているのだろうか。お国は無論だが、従来「彼女とかかわりあった多くの男性の影はきわめて薄いが、「お国」のみの心情と行動は読者にぐいと伝わってくる」（一五）と述べられるお国の周辺の男達についても考えてみたい。お国は、二人の姉の仕事に対してはその労苦に目をやり、冷淡である。下の姉の洋菓子店については「この商売も煩いものだわね。」と、お国は店の方を見て、「もつと気の利いた商売をしたらどう？」（三四四頁）と見下し、「あんな否な御亭主に何時までも連れ添って、恋もしないで何が面白いんだらう」（三五五頁）という表現にその心

情は表れている。また、自らの二階の部屋の下に住むおかみさんについても、見下した視線を向ける。「女房のガラ／＼した話振には何時も気持を悪くした。馴々しく人を見下したやうな口振も厭だつた」（三六一頁）

しかし、お国には自らの将来に明確なビジョンがあるわけではない。お国の将来を心配する二人の姉たちにはいざれ大金をつかむと大口を叩くものの、「母の寿命を氣遣ふよりも、自分の寿命が尽きかゝつてゐるやうな氣がしてならなかつた」（三五七頁）という想いは端的にお国の不安を示しているだろう。

また、河津との会話の中でも、別れという言葉が出る時、「男が平気で口にする言葉を聞くと、さながら死刑の宣言でも聞くやうな氣がした」（三五八頁）とビクビクし、現在の旦那である朝川との会話では「帰る／＼つて、我慢さうに云はないで下さい。私聞くとたんびにビク／＼するから」（三六三頁）というように、男性から拒絶されることに不安を抱いて生活している。また、自ら男の斡旋を頼んでいる「よしや」に対しては「さう思ふと、よしやに自分の生死の鍵を握つてゐられるやうな氣がして恐しくなるので」（三七七頁）とある。

これらは、根底には経済的な不安があるろう。ただし「微光」では、お国はよしやの斡旋によって経済的に困窮

するまでには至っていない。そうだとすると、むしろお国の不安は、まず現在の享楽生活が維持できるか、にあるのではないか。「女房に意見されて、無駄費ひを慎むやうに自分でも心付いたが、帰り途に松坂屋の前を通つて、意気な浴衣地が目につくと、もう素通りは出来なかつた」(二二八頁)という人物像に示されているように、お国とこの個には日露戦争後の享楽生活へ流れる青年の側面が描かれているといえる。

では、お国の不安のもう一つの大きな要素はなにか。それは居場所のなさであり、他人からの承認によるものであろう。

お国は常に周囲の承認を必要とする。「いつそ尼さんにもなれんものか知ら。」若い美しい尼姿はどんなに他人の目に見えるだらう」(三五五頁)「誰れにも忘れられたくない。どの男にも悪く思はれたくない」(三二二頁)とあるように、この、他人からの高い承認を受け続けたという欲求はお国を常に他人の承認を求めて動く人物像として形成する原動力となっている。

周囲の承認を求めつつ、お国は心中への憧れも口にする。朝川との会話の中での「恋した時には、早く二人で思ひ切つて心中でもした方がいゝと思つてよ」(三七二頁)、さらには階下に住む一五、六の勝太に「ぢや一緒に死ん

でお呉れよ」(二六〇頁)などの観念的な恋への憧れも強い。お国は承認欲求の強さと、享楽を求め、常に不安を抱えているという多様性を抱え込んでいる点で「ユニーク」な存在と言えよう。観念的で享乐的なお国が、打算の無い、生活世界とは切り離された勝太を求めるのも当然の成り行きといえよう。むろんそこにお国の居場所は作られない。

お国の不安は、酒に酔って稲荷鮫を持ってきた階下の女房に、自らの辛さを訴え、にじり寄り呆れられるなどとしても描かれている。

この、多様で矛盾を抱え込んだお国像は、「国家」「家」「社会秩序」から外れた個はどのように生きられるかという個のあり方の実験的な存在として描かれているといえよう。

河津や朝川といったお国の周囲の男はどうだろうか。学生時代からお国と関係を持ち、栃木のお国の実家へ共に行く河津は大学出のエリートとして描かれる。河津との関係では、河津とお国との居場所の有無、それに伴う時間差が明確になる。栃木の母の面倒を見るための帰郷を拒み、男に任せて東京にとどまらなければならぬお国に対して、河津は大学卒業後いったん故郷の和歌山へ帰り、九州の会社へ奉職することとなる。河津とお国と

の立場の違いのみではなく、彼らの将来に対する意識・時間のズレが明確になる。

「それに僕も学校を出たんだから、これから職業を捜さなくちやならんし、以前のやうにしちやゐられない」(三四六頁)と約束された未来を急ぐ様子、「河津はかう云ひながら、今度の旅をも美しく色取りたかつた。一生の別れといふのが、尚更旅に味ひをつけた」(三五八頁)といった描写からは、河津の時間がすでに学生の時間では無くなっていることを示している。

では、後半、お国の旦那となる朝川はどのように描かれるのだろうか。作家正宗白鳥がモデルとして言及されることの多い朝川であるが(一六)、白鳥とはいったん離して考えたい。朝川の特徴がよく表れるのは、次のようなお国とのやり取りである。

「信ずるも信じないもないさ、かうして今夜此処にゐるんだから。明日からはどうなるか、何方だつて当になりやしない」(中略)「さう思はないね。男だつてお前のやうに気儘勝手に世を渡つた方が面白いさ。その日くの風次第がいゝぢやないか。」(三七三頁)

この発言に見られるように、朝川はお国を冷静な目線で観察しつつも、自身もまた、居場所の不明確な揺れる個として描かれている実験的な人物である。それは朝川のお国に対する扱ひの揺れからも見てとることが出来る。

今更高尚な女で澄ましてるよりも、いつそ高橋お伝見たいになつて、毒婦お国の墓と棺桶の上に書かれた方が面白いぢやないか。まだ人殺しはしたことはないんだらう、恋しい男のために着物や指環を質に置く位が関の山だらう。」朝川は意地悪さうに「云つたが、「しかし、おれはお前が好きだよ、当分世話をしてやるから、ビク／＼しないで安心しといで。」(三六六頁)

右のようにお国を安心させておきながら、一方では次のように想像をめぐらす。

彼はよしやの周旋で、何の気なしにこの女を此処へ置くやうになつてからも、会社の帰りに気紛れに立ち寄るばかりだった。誰れといふ当もなく、不意に色町へ寄つて偶然に見た女に対すると同じやうに、この女にも対してゐたが、この二三度はさうばかり

でもなくなつた。何かしら心に蟬りを残され出した。
(二七一頁)

こんな女の一身を引き受けるのが煩く思はれた。

(二七七頁)

以上のように、朝川は揺れ動く個として描かれている。山本は「男たちにとって彼女は恋愛の対象ではなく、性欲の処理の道具でしかない(中略)残酷だが、この作品の中でそれが埋まることはない(一七)」とする。確かにお国を色町の女と近しく扱い、所帯を持つとうという意思は朝川には薄い。その点でお国は居場所を見つけないことは出来ないのである。

ただし朝川はお国の内心もある程度見通すことの出来る人物であり、同時に単に性欲のみではなく、むしろ居場所の無い中に生きる個としてのお国の生き方に興味を持つ存在ではないか。その意味で、朝川も「不安」から脱する享楽を求めつつ、居場所のない不安を理解し、享楽生活を続ける個であるといえよう。

四、「微光」における戦略としての「手紙」

お国の手紙に対する反応、執着の激しさには特徴があ

り、この作品において「手紙」の果たす役割について考えたい。山本は、お国にとっての手紙の重要性を次のように論じる。

お国は自分の〈言説〉に対して応答する〈他者〉からの〈言説〉を求めているからである。そしてその〈言説〉は自分の「空想」を支えてくれる〈言説〉であり、ロマンティックな「空想」を挑発する「蜜のやうな」〈言説〉なのである(中略)その「ユートピア」を実体化したくとも、彼女の望み通りには男たちは反応してくれない。彼女がしきりに仕掛けてくる〈言語ゲーム〉に誰も参加してくれないのである。(二八)

確かに、お国は、現在は嫌悪している以前の男の鈴木や、河津からの手紙を大事にとっている。そしてその内容に「蜜のやうな言葉や文字」を感じている。また、多くの男に手紙を出しその者達からの承認を求めている。その点でお国が〈言語ゲーム〉を行っていることは間違いないだろう。「二三の秘密の手紙を机の中から取り出して細かく引き破つた」(三四三頁)や「河津の手紙朝川の手紙、蜜のやうな言葉や文字に餓えてゐるお国を満足さ

すことが出来ない」とし、「何故もつと切ない恋の思ひを
明ら様に書かないだらうと思つて、恐恐鈴木の手紙を茶
筆筒の引出から取り出して読んだ。柔しい文字はその方
に多い。行李に蔵めてゐる古手紙の中から、河津のを三
四通捜し出して見たが、あの頃のものには、震ひ付きたいや
うなのがある」(三七四頁)という描写には、お国の手紙
に求める「空想」の高さを示している。

しかし、前述したように、もはや将来を見据えた点で
時間の異なる河津はその想いになかなか答ええない。お国
の「貴方よく読んで、その爪痕の所を」(三四七頁)とい
うお国の問いに対して、河津は「男は湧き上る感情を紛
らすやうに快活に云つて、手紙をズタ／＼に引き裂いて
外へ棄てた」(三四八頁)とあるように、お国の想いは河
津によって遮られてしまふのである。

では、お国にとって手紙とは懐かしむ道具としてのみ
有るのだろうか。この論文では、お国が「手紙」の「迅
速性」を戦略的に用いていることに注目したい。

たとえば、大宮で河津と遊び、東京で河津と別れたお
国は、部屋に戻り、すぐに葉書を寄越せとの旦那の朝川
の手紙を見て、すぐに帰京の知らせを書いて、夜ポスト
に投函する。この翌日、旦那の朝川から返事の手紙が届
くのであり、二日の内でやり取りが完結していることが

分かる。お国はこの迅速な手紙、郵便制度を戦略的に使
用しているのではないか。

お国との復縁を迫り、何とか居場所を探ろうとする鈴
木の手紙を読み、「不安」に駆られたお国は、諸方の男に
手紙を出す、という行為を行う。「居所の分つてゐる諸方
の男へ送つた(中略)だが、待つてゐても誰れからも返
事が来ない。手紙の文句の拙いのかともどかしがりもし
た。誰にも顧みられぬかと思ふと、一日が徒らに長くて
暮らしかねた」(三六七〜三六八頁)とあり、これに対し
て男たちは確かに望みどおりには反応しない。しかし、
誰も参加しないわけではない。河津・朝川は時間を置いて
返事をするのである。例えば河津はお国の手紙に対し
て、時間をおいて、それもよしや経由で返信する。「でも
続けざまに、二度三度朝川や河津へ手紙を出した。河津
からはよしやを経て返事が来た」(三七〇頁)とある。大
事なのは、お国の迅速性を求める手紙とそれに対し、時
に迅速に対応するものの、多くは遮り、時として遅れた
対応をする男たちの「時間差」である。

この河津との時間のズレは、河津が意識的につくり出
したものであり、お国の迅速性が成功しないこと、過去
には「震い付きたいやうな」手紙を出したお国との別れ
を暗示すると同時に、「微光」の中で河津がお国と異なる

時間のなかにいる特権的な存在であることを示していよう。

次に、お国の迅速性のある手紙の使用の前提となる当時の郵便制度についてみていきたい。

当時の郵便制度は確立の途上にあった。日清戦争後の社会経済の発展に伴い、郵政事業も著しく発達した。明治三十三年には「郵便法」「鉄道船舶郵便法」が制定された。明治四〇年には郵便法が改正され、一部郵便料金の低減が行われた。郵便制度の改善と拡充により、明治四一年前後は郵便が多くの人に利用されるようになっていた時期であった。明治三十三年から大正三年の一五年間で通常郵便物数は約七億三九五三万通から一七億九六五六万通に増加していた(一九)。「中央」である東京府下では配達回数も増加した。明治五年六月には一日五回であった東京府下の集配は、明治一六年には一日最大一九回、と急激に増加した。麻布・赤坂方面から浅草・本郷方面へあてたものはその投函後三時間で配達されたとさえいわれた(二〇)。明治一八年には集配は一二回に減るものの、郵便は明治四〇年代において、迅速に届くであろうことを確信できる通信手段だったのである。これは逆に言えば、郵便の受け手側に、迅速な対応を求めることが可能となったことを意味している。モースの『贈与論』

を引くまでもなく、手紙が、確実に、そして迅速に届くということとは、逆に受け取った側に返事を急がせることとなる。郵便制度が確立され、迅速性が増すことは、発信する側の主導権を強固なものにするのである。

明治四〇年代の郵便制度を作品にあてはめるのには、注意が必要ではあるが、お国は、この当時の手紙の迅速性を利用しているのである。いきなり栃木の母のお見舞いに誘い出された河津の「突如にあの手紙を見て、どうしようかと一寸考へたよ」(三四六頁)とあるように、お国は突然手紙を送る。

ただしこの郵便制度の迅速性はお国だけではなく朝川も使用する。朝にお国が朝川を電車まで見送ったのに対して、朝川の手紙はその日の夕刻に配達される。「そして夕方になって、つい仮睡うたたねの夢を見てみたが、ふと目醒めると、畳の上に思掛けない朝川からの手紙が来てみた」(三七四頁)とあるように、ここから朝川がお国に対し迅速に対応していることが分かる。

また、会いに来ない朝川、返事があっても簡単な葉書の朝川に愛想をつかしたお国は別れを暗示する手紙を朝、投函する。

御勝手になさい。」とツケく書いた。そして夢中で

ポストへ駆け付けてそれを投げ入れたが、手紙がポストの底へ落ちる幽かな音が強く胸に響いた。(三七八頁)

この手紙もまた、投函の翌朝に返事が来る。この日の午後にはよしやから新たな斡旋を受ける約束があり、お国は翌朝の返信が来ることに賭けたのだといえる。

翌朝は階下の者も寝過してゐたが、気立たましい郵便の声にお国は真先に目を醒まして、玄関へ下りて行つた。朝川からの手紙で、今日午前中に行くから待つて居れと云ふのである。

「矢張り会へるのだ。」と思つて、俄かに自分といふ者に強味が出来た。(三八二頁)

郵便制度によって即時に届けられる郵便物のシステム。それを利用しての攻撃的な方法が、お国の「恋愛術」なのである。

お国は、現代の電子メールのように、何通も、また即時の返事を期待して朝川と手紙を使ってやり取りをする。この郵便の使い方は当時の郵便事情を背景としている。そのやり取りの中で、お国自身も迅速性のある郵便制度

にとりこまれて、だからこそ相手との時間差に不安を覚えるのである。

お国と朝川についていえば、朝川はお国の恋愛術に参加しないのではなく、手紙を時間を遅らせて使う。

居場所の無い不安、観念的な恋、強い承認欲求の中で、焦り不安を抱えるお国に対して、お国に執着し教養のある鈴木はお国から拒絶され、それゆえに手紙のやりとりはよしやを通じてであり、昔の恋人であり大学卒として有望な就職を考える河津はもはや別の方向を見、彼もよしやを通じてしか手紙を寄越さなくなる。

一方、一軒家はあるものの、お国の不安を理解し、その日暮らしを是とする朝川は具体的な刺激として時として迅速に、時として遅らせて対応する。お国と朝川の間にはまだ手紙の迅速性を用いての駆け引きが存在しているのである。

この迅速性のある手紙を使つての駆け引きの表現は、正宗白鳥「微光」のみに見られる特徴ではない。同時代の他の作家の作品に視野を広げるならば、明治四一年に『朝日新聞』に掲載され、翌年刊行された夏目漱石の「三四郎」においても郵便制度の迅速性が使用されている(一一)。ヒロイン美禰子は迅速性のある手紙、葉書を出すことで野々宮や三四郎に自らの思いを伝え、その回答

を迫っている。

三四郎は美禰子の「明日午後一時頃から菊人形を見に参りますから、広田先生のうち迄入らつしやい。美禰子」(二二) という葉書を受け取る。美禰子はなぜ「明日」と決めつけているのだろうか。ここにも、葉書がいつ届くか分からない通信手段という認識は見られない。美禰子の葉書では、「今日」三四郎の元に葉書がつくことが確信されている。さらに葉書の指示に従って広田先生宅に着いた三四郎に対して、美禰子は「端書は何時頃届きましたか」(二三)と尋ねている。美禰子にとって葉書が着くことは当然であり、その到着の時刻が問題なのである。

この確信もまた、明治中期以降の郵便制度の確立によるものである。また、美禰子の出した絵葉書も明治三三年に私製はがきが認可されると流行しはじめ、日露戦争では陸軍の恤兵部によって大量に作成・配布され流行したものであった(二四)。郵便制度の迅速性が東京に特化したものであったことは、三四郎の田舎の母から来る手紙が、一定の期間の報告のまとめであったことから分かる。三四郎もまた美禰子によって「中央」の時間の中に、その迅速性に葉書によって巻き込まれていくのである。

三四郎は絵端書を受け取った翌日に美禰子から「あなたは未だ此間の絵葉書の返事を下さらないのね」(二五)と

返事を催促されることとなる。美禰子は三四郎に対する葉書と同じことを野々宮に対しても行っていると推定される。それは野々宮が美禰子の手紙を受け取った直後に、彼女に送るリボンを購入していることに表れている。美禰子が郵便を使って主導権を取ろうとしていることが伺えよう。

ただし、この美禰子の「恋愛術」は小森陽一が美禰子について述べている「(男たちの形成する本郷文化人的社会において——論者注)美禰子もやはり性的商品・性的記号として流通せざるをえなかった」(二六)ことを覆すことにはならない。結婚をせかされる時間の中にいる美禰子は迅速な郵便制度を利用する「恋愛術」をいっつつ周囲の男の時間を操ろうとしたといえよう。

この美禰子の手紙に対して、三四郎や野々宮が迅速な反応をしている描写は見られない。ここには、兄が家を出るため、早急に結婚をせかされる美禰子と、大学生の三四郎、大学で研究を行う野々宮とのズレがあるだろう。美禰子の迅速性を生かした葉書、手紙の使用と、野々宮や三四郎たち学生の時間差こそが彼女を結婚へと導くこととなる。

同じように迅速性のある手紙を出す「微光」のお国は、しかし「三四郎」の美禰子とは対照的な方向を進む。お

国には居場所は見つからないまま、朝川との関係を保留したまま、新しい「旦那」を紹介してもらいによしやへ向かうのである。お国が今後、経済的にも、承認欲求としても「不安」の中生きることが暗示されている。

ただ、お国は手紙を大切にし、さらにこれからも迅速性のある手紙を使うことで「不安」の中を生き延び、「微光」を掴もうとしている。お国の「旦那」である朝川もまた、時間を繰り返しながら、お国、もしくは他の女との駆け引きを続けていくのではないか。この手紙を使いながら「不安」の中で駆け引きを続けることで生きているお国や朝川の同時代の実験的な生き様を描いている点に、「微光」の日露戦争後の「世界」の切り取り方の特徴があるのではないだろうか。

五、おわりに

日露戦争後の「不安」の時代の中で、お国は観念的な愛と享楽と他者からの承認欲求を求め、それが満たされない不安を感じながら、生きる。お国は、日露戦争後の青年像と一部、特に居場所のない不安と享乐的な生活の側面で重なるものであった。一方、朝川もまた、居場所のなさや享楽に生きる個として造形されている。お国、朝川には日露戦争後の青年たちの不安の中での生が反映

されているだろう。

不安の中で他人からの承認を求めるお国は、迅速性のある手紙を使い、性急な返答を求め、戦略的に、積極的に他人の承認を得ることを行っている。

「微光」はお国と時間の流れの違う大学卒の河津とのズレ、享乐的な朝川との駆け引きを手紙を通じて描く。生きるため、享楽のため、他人からの承認のために手紙という手段をつかい駆け引きを行うお国の攻撃的な物語であるのだ。

【注】

- 一 平岡敏夫『日露戦後文学の研究』上、有精堂、昭和六〇年五月、一九〇頁
- 二 正宗白鳥『文壇的自叙伝』中央公論社、昭和一三年、六三頁・昭和一三年二月〜七月『中央公論』に掲載
- 三 猪八戒『十月の小説』（『国民新聞』国民新聞社、明治四三年一〇月一四日、一面）
- 四 「十月の重なる雑誌」（『新潮』新潮社、明治四三年一月、一二五頁）
- 五 ABC「現文壇の平面図」『文章世界』第六卷第一号、博文館、明治四四年一月、一三〇頁

- 六 徳田秋江「四十三年小説界概観（二）」（『国民新聞』国民新聞社 明治四三年二月二十九日、一面）
- 七 徳田秋声「正宗白鳥の『微光』」（『文章世界』第六卷第一〇号、博文館、明治四四年八月、三四頁）
- 八 猪野謙二「白鳥と泡鳴」（『明治の作家』岩波書店、昭和四一年一月、三七六～三七七頁）
- 九 紅野敏郎「正宗白鳥の『微光』と『五月幟』」（『国文学 解釈と鑑賞』第七二巻三号、至文堂、平成一九年三月、一七七頁）
- 一〇 山本芳明「白鳥の軌跡——空想に煩悶」する青年から「自然主義」作家へ 正宗白鳥ノート②」『学習院大学文学部 研究年報』第三五輯、学習院大学文学部、平成元年三月、一三五頁
- 一一 「白鳥氏の微光」『国民新聞』国民新聞社、明治四四年七月二五日、一面
- なお、既に「何処へ」（『早稲田文学』二六～二九号、明治四一年一～四月）において、主人公健次に仮託し、「人生の寂寞を感じ、厭世的思想を抱いたのである。これ実に今日の人間が胸中を代表したものであるまいか」とする評論が提出されている（長谷川天溪「近時小説壇の傾向」『太陽』一四巻二号、博文館、明治四一年二月、一五六頁）

- 一二 二葉亭四迷「眼前口頭」『早稲田文学』明治四一年六月、（『日本現代文学全集 4』講談社、昭和三年八月、四二六頁）
- 一三 正宗白鳥「二葉亭四迷」『作家論（一）』創元社、昭和六年八月、七二頁
- 一四 荻部直「光の領国 和辻哲郎」岩波書店、平成二二年一月、三三頁
- 一五 注九同論、一七六～一七七頁
- 一六 「いうまでもなく白鳥の面魂を伝えているのである」（田辺明雄『評伝・正宗白鳥』学芸書林、昭和五二年九月、一三一頁）・「朝川のモデルが白鳥自身」（注一〇同論、二二八頁）
- 一七 注一〇同論、二二八頁
- 一八 注一〇同論、二二七頁
- 一九 郵政省『郵政百年史』吉川弘文館、一九七一年四月、二九二頁
- 二〇 注一九同書、二五九頁 一方、地方の郵便局の市外地配達は、隔日一回というのが普通であった。
- 二一 漱石作品と郵便に関して、その全体像をつかんだ先行研究として、諸岡知徳「不在のコミュニケーション——漱石の中の〈郵便〉——」（『甲南大学紀要 文学編一九』甲南大学、平成一三年三月）が挙

げられる。諸岡は「坊っちゃん」や「三四郎」では、離れた場所にいる人間を結びつけるために「郵便」が用いられる。しかし、そのためには「郵便」の書き手や読み手による一方的な願望や対象の理想化によって精神的な絆が強調されなければならなかった。これは人間が人間を理解することの限界であっただろう（二二二頁）とする。「郵便」の持つ本来的な「不安」を指摘した諸岡論には首肯できる。ただし本論では、「郵便」の別の側面、当時の東京における迅速な郵便制度から考察を行った。また、細馬宏道『絵はがきの時代』（青土社、平成一八年六月）では、三四郎の受け取る封書・葉書の温度差について指摘されている。

二二 夏目金之助『漱石全集』第五卷、岩波書店、平成元年四月、四〇〇頁

二三 注二二同書、四〇二頁

二四 注一九同書、三三一～三三二頁

二五 注二二同書、四五四頁

二六 小森陽一「個人と活字『三四郎』における文字のドラマトゥルギー」（『現代思想』一九九三年一月、六四頁）

本論文は、日本文学協会近代部会、平成二六年四月例会にて発表したものを基盤として論文化したものである。発表の際に頂いた貴重なご質問・ご意見等を参考にさせていただきます。感謝したい。

（本学准教授）